

平成23年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成24年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は6月には「離岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、全般的には「**平年並み～やや高め**」で経過するが、沖縄島周辺海域では前半は「**やや低め～平年並み**」で経過する。

※引用符「」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「**やや**」 : 約3年に1回程度の出現確率

「**平年並み**」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年を上回る。
- (4) マイワシは前年並み。
- (5) ウルメイワシは前年を下回る。
- (6) カタクチイワシは前年並み。

※「前年」は平成23年4月～9月。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、内海

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

担当：皆川、阿部

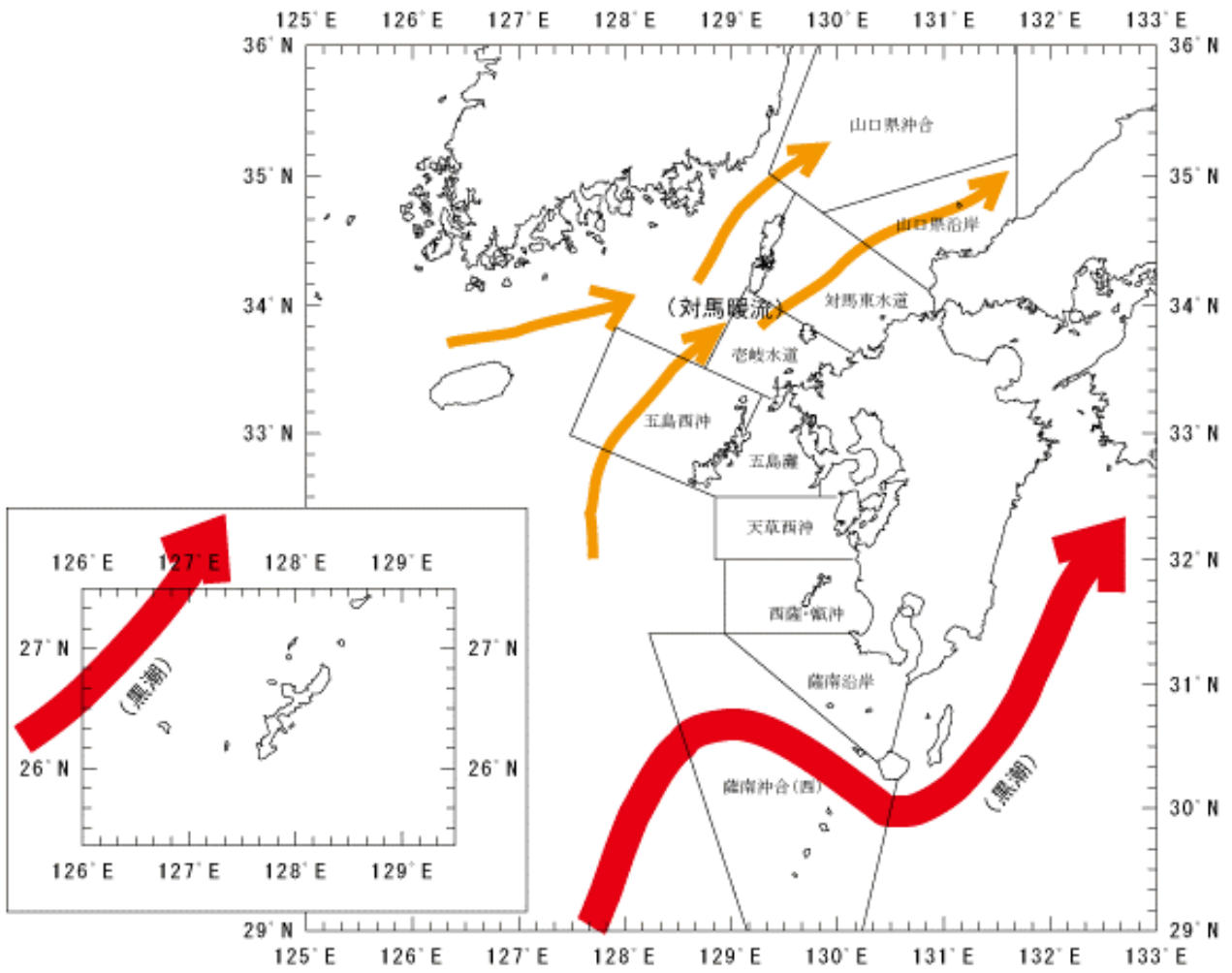
電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し (2012年4月～9月)

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は6月には「離岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合で「やや高め」、大陸棚上、黒潮域で「平年並み～やや高め」、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸で「平年並み」、沖縄島周辺海域で、前半は「やや低め～平年並み」、後半は「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過 (2011年10月～2012年3月)

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10月「平年並み」、11月「かなり高め」、12月「やや高め」、1・2月「平年並み」。

南部：10月「平年並み」、11月「かなり高め」、12月「やや高め」、1・2月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10・1・2月は「離岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過。

(2) 海面水温

10月「平年並み」、11・12月「やや高め」、1・2月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10月「やや高め」、11月「はなはだ高め」、12月「やや高め」、1月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「平年並み」、11・12月「はなはだ高め」、1月～3月「平年並み」。

対馬東水道：10月「平年並み」、11・12月「かなり高め」、1月～3月「平年並み」。

壱岐水道：11月「やや高め」、2月「平年並み」。

五島西沖：11月「かなり高め」、2月「やや低め」、3月「平年並み」。

五島灘：11月「かなり高め」、2月「やや低め」、3月「やや高め」。

天草西沖：11・1・3月「平年並み」。

西薩・甌沖：11・1・3月「平年並み」。

薩南沿岸：11・1月「平年並み」、3月「やや高め」。

薩南沖合：11・1・3月「平年並み」。

沖縄島南東：10月「やや低め」、11月「やや高め」、3月「やや低め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10月～12月「やや高め」、1月～3月「平年並み」。

山口県沿岸：10・11月「やや高め」、12月～3月「平年並み」。

対馬東水道：10・11月「平年並み」、12月～3月「やや低め」。

壱岐水道：11・2月「平年並み」。

五島西沖：11月「平年並み」、2月「はなはだ低め」、3月「平年並み」。

五島灘：11月「平年並み」、2月「はなはだ低め」、3月「平年並み」。

天草西沖：11月「平年並み」、1月「やや低め」、3月「かなり低め」。

西薩・甌沖：11月「平年並み」、1月「やや低め」、3月「かなり低め」。

薩南沿岸：11・1月「平年並み」、3月「かなり低め」。

薩南沖合：11月「やや低め」、1月「平年並み」、3月「かなり低め」。

沖縄島南東：10月「かなり高め」、11月「やや高め」、3月「平年並み」。

3. 現況 (2012年3月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「やや高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「やや低め」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2012年4月～9月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2012年級群（2012年生まれ））、1歳魚（2011年級群）、2歳魚（2010年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年を上回り、平年並み。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体：27～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に、15～25cmの0歳魚（豆銘柄）も漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年を下回り、平年並み。

(3) 魚体：沖合域では28～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に、15～28cmの0歳魚（豆銘柄）も漁獲される。沿岸域では31～37cmの2・3歳魚（小・中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15～19cmの1歳魚（中・大羽銘柄）が、漁期後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は18cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：主に5月～7月に沿岸域に漁場ができる。

(3) 魚体：4月は10cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）に3～6cmの0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が混じり、5月以降は5～10cmの0・1歳魚（カエリ～大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2011年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過(2011年10月～2012年1月)および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため、資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年と同程度の高い水準で経過し、2004年にかけて資源量は増加した。2005～2007年の加入量水準は近年では低い水準となり、2008年にかけて資源量は減少したが、2008年以降には加入量は増加したとみられ、資源量もやや増加した。

東シナ海・日本海(青森県～鹿児島県)での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005～2007年は減少した。2006年以降は減少して13万トン前後で推移し、2010年は12万9千トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代は比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減した。1998～2000年にかけてさらに減少し、2000～2007年は低い水準で横ばい傾向を示していた。2008年の高い加入量のため、資源量は2008年に急激に増加し、2009年も2008年と同程度の値を示したが、2010年の資源量は2009年よりやや減少した。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年は13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年に41万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少した。その後もさらに減少し、2000～2006年は9万トン前後で推移していたが、2007年は10万6千トン、2008年は12万1千トン、2009年は13万1千トンと緩やかな増加傾向を示した。2010年は2009年よりもやや減少し、11万8千トンであった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992～2009年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2004年級群の高い加入量のため、資源量は2005年に高い値を示した。その後、資源量は2008年にかけて減少傾向を示したが、2009年以降は緩やかな増加傾向を示している。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の8万8千トンが漁獲された後、減少傾向を示し、2004年は3万1千トンであった。2005年は7万6千トンに増加したが、その後は再び減少傾向を示し、2010年は2万9千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は増加傾向にあり、2010年の漁獲量は6千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は、1970年代後半と1980年代後半に多く、1980年代前半および1990年代後半には少なかった。近年では、1990年代後半から2000年まで資源量は漸減傾向にあり、2001～2007年には資源量がやや増加し、2008年は再び減少したものの2009・2010年は増加した。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1981年から1989年にかけて徐々に増加し、1989～1993年は4万トン前後で推移したものの、その後減少した。2000年に1万3千トンとなった後は増加に転じ、2009年の漁獲量は2万3千トン、2010年の漁獲量は2万9千トンであった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1970年代から1980年代後半までは低く、1980年代後半から増加し始めた。1997～1999年の資源量水準は推定されている期間の中で高位であった。しかしながら資源量は2000年から2004年まで一旦減少した後、2007年にかけて増加したものの、2008・2009年に減少し、2010年は2009年と同水準であった。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1982年に7万3千トンとなった後1990年まで減少した。その後、漁獲量は徐々に増加し、1998～2000年には12万トン以上となった。2001・2002年は漁獲量が一旦減少したものの、その後は再び増加し、2008年には9万7千トンとなったが2009年は5万1千トンと減少し、2010年は6万5千トンであった。

2. 漁況の経過

2011年10月～2012年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖および五島西沖が中心であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計6万4千トンで前年(2010年10月～2011年1月、8万7千トン)を下回った。マアジは1万4千トンで前年(1万トン)を上回り、さば類は3万9千トンで前年(6万9千トン)を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、山口県・佐賀県・長崎県で前年を上回り、福岡県・熊本県では前年並み、鹿児島県では前年を下回り、全体としては前年・平年を上回った。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年・平年並みであった。漁獲の主体は20～26cmの0歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年並みであった。漁獲の主体は31～36cmの2歳魚と29cm以下の0歳魚であった。マイワシは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は17cm以下の0歳魚であった。ウルメイワシは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は15～20cmの0・1歳魚であった。カタクチイワシは、前年並みで平年を下回った。漁獲の主体は11・12月が2～7cmの0歳魚で、1月は9cm以上の1・2歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4月～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2010年級群は2009年級群を上回る豊度と考えられ、2011年級群は2010年級群を下回る豊度と考えられる。2012年級群の豊度を予測するのは難しいが、2011年と同程度と考えると0歳魚(2012年級群)は前年(の0歳魚、以下同様)と同程度、1歳魚(2011年級群)は前年を下回り、2歳魚(2010年級群)は前年を上回り、全体としては前年並みと考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日1隻当り漁獲量)(参考図参照)は、2006・2007年は低い水準だったが、2008年以降は増加に転じた。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲

量は2011年には減少し、近年では低い水準となった（参考図参照）。全体の来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は低調だった前年を上回り、平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないため、漁獲は低調に推移するが、1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、7月以降には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。2010年級群の豊度は2009年級群より低く、2011年級群の豊度は2010年級群と同程度と考えられる。2012年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向で、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温（東シナ海南部、2月）が、2012年は2011年よりやや低い程度なので（水温が低いと初期生残に有利）、2011年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚（2012年級群）は前年並み、1歳魚（2011年級群）は前年並み、2歳魚（2010年級群）は前年を下回ると見積もられる。来遊群の主体となる1歳魚が前年並みであることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、前年・平年並みと考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4月～9月期には1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。2010年級群の豊度は2009年級群を下回り、2011年級群の豊度は2010年級を上回ると考えられる。2012年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向なので、2011年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚（2012年級群）は前年並み、1歳魚（2011年級群）は前年を上回り、2歳魚（2010年級群）は前年を下回ると見積もられる。来遊群の主体となる1歳魚が前年を上回ることから、全体の来遊量は前年を上回ると考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年を上回ることから前年を上回ると考えられる。沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年を下回り、平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

例年、4月～9月期の前半は1歳魚（中・大羽銘柄）が、後半（夏以降）は0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。これまでの漁獲状況等から、2011年級群の豊度は2010年級群と同程度と考えられる。2012年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2011年級群と同程度と見積もると、0歳魚（2012年級）は前年と同程度、1歳魚（2011年級）も前年と同程度であり、全体の来遊量は近年では好調だった前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、4月～9月期の前半は1・2歳魚（大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。これまでの漁獲状況等から、2010年級群の豊度は2009年級群と同程度が高く、2011年級群の豊度は2010年級群よりも高いと考えられる。2012年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2012年2月の漁況が漁獲の主体となる鹿児島県で前年を大きく下回っており、2011年級群を下回ると考えられる。これらのことから、全体の来遊量は前年を下回り、平年並みと考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、4月～9月期には4月に1・2歳魚（大羽銘柄）が、5月以降に0歳魚（カエリ・小羽銘柄）主体に1歳魚（大羽銘柄）まじりで漁獲される。2011年級群の春季発生群の豊度は2009・2010年級群の春季発生群の豊度並みかやや下回ると考えられる。2011年級群の秋季発生群の豊度は2009・2010年級群の秋季発生群の豊度並みか上回ると

考えられる。2012年級群の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2011年級群の春季発生群の豊度が前年並みか下回り、秋季発生群の豊度が前年並みか上回ると考えられるので、2011年級群の豊度と同程度と見積もるのが妥当だろう。これらのことから、前年・平年並みで推移すると考えられる。

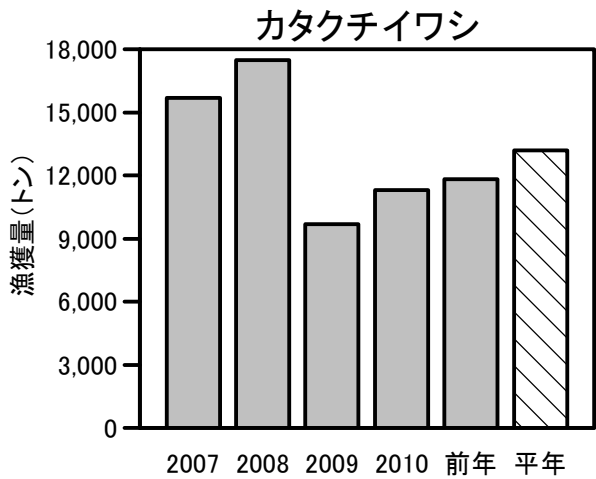
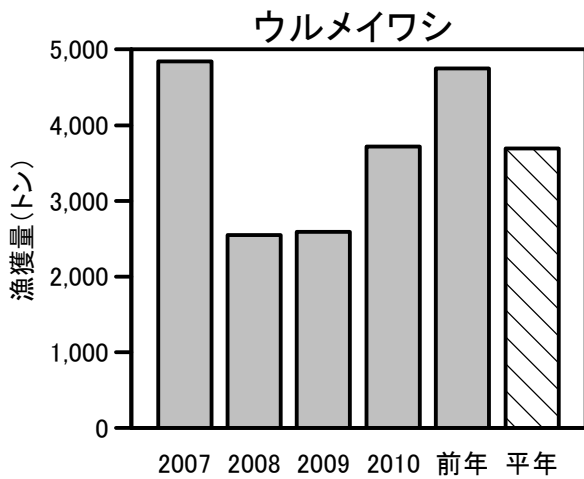
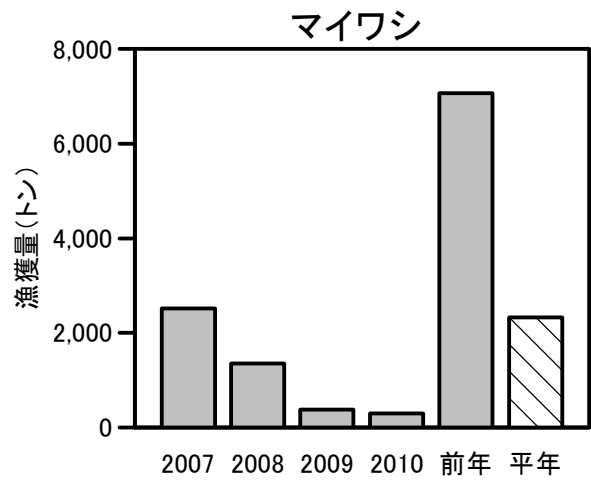
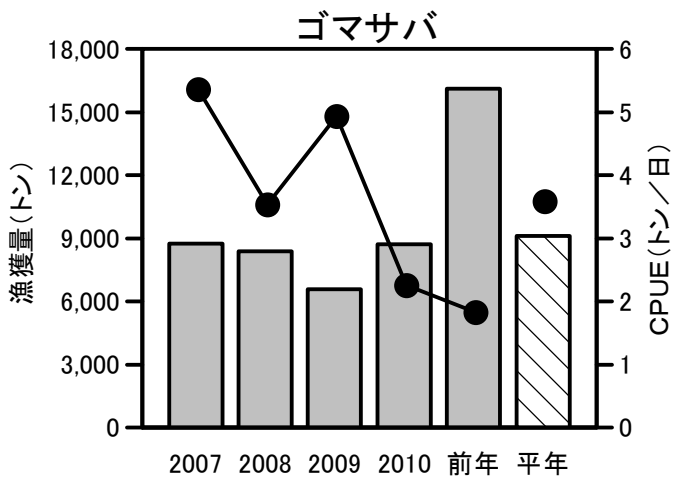
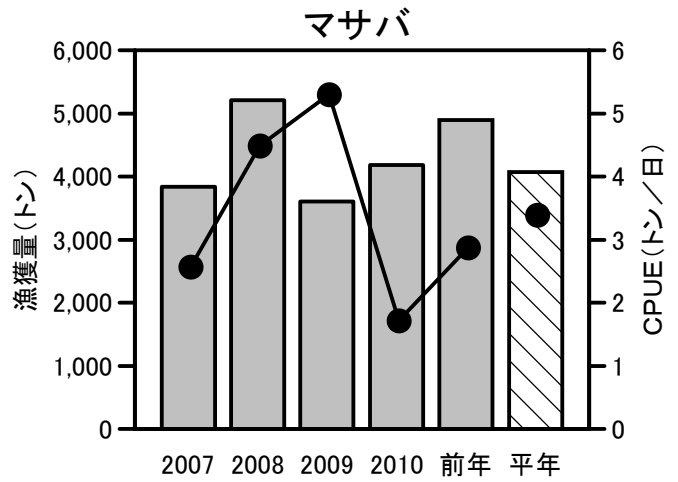
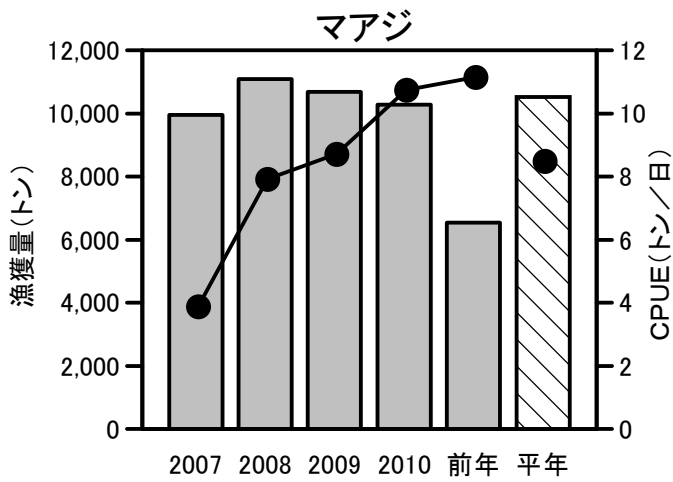
表1. 沿岸域の漁況経過(2011年11月～2012年1月、一部2011年9・10月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	<p>中型まき網で628トンの水揚げがあり、前年・平年を上回った(前年比129%、平年比122%)。</p> <p>棒受網では、トウマゴ(10cm以下)が2トン水揚げされ、前年を下回り、平年を上回った(前年比68%、平年比178%)。</p>	<p>中型まき網で91トンの水揚げがあり、前年・平年を下回った(前年比22%、平年比34%)。</p> <p>棒受網、すくい網では水揚げされなかった。</p>	
福岡	<p>代表港中型まき網の水揚量は238トンで前年を下回り、平年並みであった(前年比63%、平年比102%)。ゼンゴ銘柄の水揚量は前年比31%で、小銘柄が前年比89%であった。</p> <p>棒受網の水揚量は19トンで前年を上回り平年を下回った(前年比1065%、平年比42%)。</p> <p>小型定置網の水揚量は3トンで、前年・平年を下回った(前年比33%、平年比32%)。</p>	<p>代表港中型まき網の水揚量は450トンで前年を下回り、平年を上回った(前年比77%、平年比145%)。大銘柄の水揚げはなく、ギリ銘柄が水揚げの76%を占めた。豆銘柄の水揚量は平年比1537%であった。</p> <p>棒受網の水揚量は25kgで、平年を下回った(平年比1%)。</p>	<p>代表港中型まき網の水揚量は239トンで、前年・平年を上回った(前年比7110%、平年比2247%)。</p>
佐賀	<p>前年・平年同期を上回った(前年比124%、平年比122%)。</p>	<p>前年・平年同期を下回った(前年比19%、平年比9%)。</p>	
長崎	<p>地域により差があるが、概ね前年・平年を上回った(前年比151%、平年比187%)。</p>	<p>地域により差があるが、概ね前年・平年並みであった(前年比114%、平年比100%)。</p>	
熊本 牛深港	<p>水揚量は108トンで、前年並みで、平年を上回った(前年比98%、平年比120%)。</p>	<p>水揚量は358トンで前年・平年並みであった(前年比104%、平年比91%)。</p>	
鹿児島	<p>県4港のまき網では、アジ仔(2011年級群)主体の漁獲となった。期間中合計で444トンの水揚げで、前年・平年を下回った(前年比64%、平年比63%)。</p>		<p>県4港のまき網では、期間中薩南海域が主漁場となり、ゴマサバ中・中小(2009年級群)、ゴマサバ豆(2011年級群)主体であった。期間中合計で5084トンの水揚げで、前年・平年並みであった(前年比120%、平年比120%)。</p>

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網、棒受網、すくい網では水揚げされなかった。	中型まき網、棒受網、すくい網では水揚げされなかった。	棒受網、すくい網で151トンの水揚げがあり、前年を下回り、平年並みであった(前年比43%、平年比91%)。
福岡	代表港中型まき網の水揚量は1トンで前年・平年を上回った(前年比2274%、平年比241%)。棒受網の水揚量は0.1トンで、前年・平年を下回った(前年比3%、平年比2%)。	代表港中型まき網の水揚量は43トンで前年・平年を上回った(前年比9803%、平年比750%)。棒受網の水揚量は8kgで前年・平年を下回った(前年比1%、平年比2%)。	代表港中型まき網では水揚げがなかった。棒受網の水揚量は34トンで前年を上回り、平年並みであった(前年比128%、平年比111%)。
佐賀	水揚げはなかった。	水揚げはなかった。	前年を上回り、平年並みであった(前年比182%、平年比117%)。
長崎	前年を下回り、平年並みであった(前年比47%、平年比111%)。	地域により差があるが、前年・平年を上回った(前年比761%、平年比680%)。	地域により差があるが、概ね前を上回り、平年を下回った(前年比122%、平年比59%)。
熊本 牛深港	水揚量は297トンで、前年・平年を上回った(前年比6580%、平年比2036%)。	水揚量は497トンで、前年を上回り、平年並みであった(前年比384%、平年比118%)。	水揚量は191トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比1538%、平年比71%)。
鹿児島	県4港のまき網では、ウルメイワシ・サバ仔に混じって甑島周辺で漁獲された。魚体は17cm主体であった。期間中合計で291トンの水揚げで、前年・平年を上回った(前年比247%、平年比379%)。北薩海域の棒受網でもウルメイワシ・サバ仔混じりで60トンの水揚げがあり、前年・平年を上回った(前年比2295%、平年比7253%)。	県4港のまき網では、北薩海域および薩南海域で17~20cm主体に漁獲された。期間中合計で984トンの水揚げで、前年・平年並みであった(前年82%、平年92%)。北薩海域の棒受網では63トンの水揚げで、前年並みで平年を上回った(前年比116%、平年比144%)。	県4港のまき網では18トンの水揚げで、前年を上回り、平年を下回った(前年比772%、平年比14%)。北薩海域の棒受網では28トンの水揚げで、前年を上回り、平年を下回った(前年比160%、平年比56%)。

注：「前年」は2010年11月～2011年1月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ; 棒グラフ)と大中型まき網の1日当たりの漁獲量(沖合漁況の指標の一つ; 折れ線グラフ、CPUE)。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県(ゴマサバを含むが主にマサバ)、ゴマサバは鹿児島県(マサバを含むが主にゴマサバ)、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ機関)
熊本県水産研究センター	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所
鹿児島県水産技術開発センター	